

地震火山観測研究センター年報：2006 年度版

<https://doi.org/10.15017/16958>

出版情報：九州大学大学院理学研究院附属地震火山観測研究センター年報．2006，2007-10．九州大学大学院理学研究院 附属地震火山観測研究センター
バージョン：
権利関係：





九州大学大学院理学研究院附属地震火山観測研究センター助手の松尾綱道^{のりみち}氏が2006年9月2日、胃癌のため県立島原病院にて逝去された。享年63歳。長寿社会にあっては定年退職直前の早世で痛恨の極みである。

氏は福岡県山門郡山川町ご出身で、1967年に九州大学理学部物理学科を卒業、大学院博士課程をへて、1976年8月に設立間もない九州大学理学部附属島原火山観測所（当時）に赴任された。

同観測所は雲仙岳を研究対象にしていたが、1792年以降目立った火山活動がなかったため、地震観測設備は極めて貧弱であり、当時地震が群発していたにもかかわらず地震専門家は不在であった。そこでの氏の任務は、地震観測点の設営・増設と震源決定であった。翌年3月には常設地震3点観測網を構築、京都大学火山研究施設の久保寺章教授のご指導を受けながら精力的に観測に着手された。

1977年4月からの1年間の氏の最初の観測成果として、千々石湾（橋湾）・千々石町岳地区・島原眉山一帯に震源域が分布していること、特に千々石湾と岳地区での地震発生が交互で、しかもこれらの震源が西側に深くなっていることを突き止めた。最近の総合的な観測結果から、このような挙動は千々石湾から普賢岳方向へのマグマの波状的移動であり、岳地区がマグマポケットであ

ったことと符合するものであった。振り返ってみると、これらの現象は1990年普賢岳噴火の「胎動」であったといえる。

当時はまだアナログの時代であり、煤書き記録紙の取替え・ルーペによる地震記象の読み取り・読み取りデータのパソコン入力・X-Yプロッタでの震源分布描写など、研究補助員の支援を受けながらとはいえ、地震群発時の寝食を忘れての氏のご苦勞は大変なものであった。1983年には飯盛観測点の増設など、地震観測網の拡充にも尽力された。

島原火山観測所は、国の地震予知計画で空白となっていた九州地域の地震観測を推進するため、1984年に「島原地震火山観測所」に改組されたが、これに呼応するかのように、岳地区を震源域としてM5.7、最大震度Vの被害地震が発生。この最初の試練に、国内最小規模の観測所として氏1人の奮闘に頼らざるを得なかった。

翌年からは九州中北部を対象とした常設地震観測点の設営が、毎年1～2箇所実施された。助手1人が増員され、清水 洋氏が加わったとはいえ、土地の選定・地主との交渉・大学施設部との打ち合わせには大変な労力を要したが、ほとんどの作業が氏中心で実施された。この広域地震観測点の増設は、1996年までの11年間で16箇所にも及んだ。

他方、雲仙火山では地震頻発傾向にあったが、マグマ溜まりの潜在が想定されていた千々石湾で1989年より地震が群発した。氏は、火山性微小地震の観測には常設4点観測網では不十分と考えていたが、観測所の運営費が不足していたことから、私財を投じて観測点を設置して観測に当たられた。1990年夏には普賢岳一帯で地震が群発したが、氏が火口から3.5kmの至近距離に設置していた礫石原臨時観測点で火山性微動が初めて検出され、噴火への移行の可能性が認識されたのも、氏の功績である。

1990年11月17日気になっていたのか、氏はまだ暗かった早朝6時に観測所に出勤、地震記録紙から異常を察知して我々所員に連絡された。果たして夜明けとともに噴火が目視確認され、奮戦苦闘の日々がはじまった。噴火中は商用電源のない普賢岳一帯に臨時観測点を増設、観測体制の強化に尽力された。また危険を冒しながら火口に接近し、噴火の貴重な様子を写真やビデオテープに記録、噴出した新しい溶岩塊を採取したのも氏であった。さらに次々と出現する溶岩ロープの確認や、住民避難に関する自治体への助言にあたっても、氏の冷静か

つ慎重な判断が支えとなった。

普賢岳噴火を予見していたかのように、氏がこつこつと構築した地震観測網により、噴火が始まる10数年前から噴火終息にいたるまで膨大な地震データが蓄積され、貴重な研究資料となった。さらに1997年の鹿児島県北西部地震、そして2005年の福岡県西方沖地震において十分な震源データが捕捉出来たのも、地震観測網の拡充にご尽力された氏のご功績である。

几帳面な氏は、地震観測資料のデータベース化に尽力してこられた。これらの中には解析未完のものも多い。普賢岳噴火中の莫大な量の写真やビデオテープの整理に着手されたが、ついに未完に終わってしまった。病魔には勝てずご本人もさぞ無念であったかと思う。病に冒されながらも所員には悟らせず、床に伏す直前まで普賢岳の観測点の保守をされていた氏の責任感と精神力には感服させられた。観測魂を見せつけられた思いである。残された資料は後輩達が十二分に活用してくれるものとご期待ください。氏の計り知れない観測所へのご貢献に感謝し、心からご冥福をお祈りいたします。

(記 太田一也、九州大学名誉教授)



1992年9月 雲仙・普賢岳地獄峠火口から溶岩ドームを観測している松尾綱道氏。